京都大学	博士(文学)	氏名	茂　　牧　人
論文題目	ハイデガーと神学		

（論文内容の要旨）

一　問題と目的

本論文は、ハイデガーの初期から一九三〇年代の思索を、形而上学の批判と克服というモチーフで統一的に解釈するために、＜隠れたる神＞の神学と否定神学の伝統の中において理解することを目的としている。ハイデガーは、その存在の思索を深淵・脱根底（Abgrund）の思索として捉え、その深淵・脱根底から弁証法的な覆蔵性と非覆蔵性の運動としての真理が顕現してくることを主張している。このモデルは、シェリングの自由論の無底から実存と根底の働きが現れるという構造から着想を得たものであるが、それらは、＜隠れたる神＞の神学と否定神学の流れの中に置くときにうまく浮彫にすることができる。

二　各章の要旨

第一部は、三章から構成されている。まず第一章については以下の通りである。

まず第一章において、ハイデガーは、初期フライブルク期から、この形而上学批判と克服のモチーフを展開していたことを示す。特に新約聖書のパウロの書簡の分析を通して信仰における事実的生経験を取り出す作業を行ったが、その際主観・客観・図式に則っては決して事実的生経験を剔出することはできないと主張して、主観性の形而上学批判を展開した。さらに彼は、それをアリストテレスに基づくギリシアの哲学理論の中に既にあることを見出す。この主観・客観・図式に基づく神概念は、神をあらゆる存在者の原因として、最高存在者として捉えることになる。ここから中世哲学の中で、存在・神・論としての形而上学が、確立するという。しかしこの形而上学によって、神を最高存在者とすると、信仰の事実的生経験を隠蔽してしまうことになる。今、この信仰の事実的生経験を剔出するためには、存在・神・論としての形而上学的思考を解体する作業をしなければならない。

さらに、筆者は、主観・客観・図式に基づく主観性の形而上学批判と、そのもとになっているギリシアの存在・神・論としての形而上学の歴史の解体という二つのモチーフをハイデガーが着想しているのは、ルターの「十字架の神学」の基になっている＜隠れたる神＞の神学の理解からであることを示した。

第二章において、ハイデガーが、マールブルク期において、ブルトマンと積極的に行った対話を考察した。特に、一九二四年二月に、ブルトマンの演習の中で「ルターにおける罪の問題」と題する研究発表を行った。彼は、この中でも初期フライブルク

期に獲得していた、主観性の形而上学批判のモチーフと存在・神・論としての形而上学の歴史の解体のモチーフを維持している。

さらに、以上の研究の成果は、一九二七年の「現象学と神学」の中に取り入れられることになった。ここで神学の役割は信仰の具体的生経験を扱う実証学であるのに対して、哲学は、存在者の具体的事実的生経験を扱う諸学の源泉と由来を問う超越論的学としての存在論的な学であるとして、両者を分離する作業を行う。当時のハイデガーは、＜哲学と神学との混同（Mixophilosophicotheologia）＞を厳しく批判した。両者を分離することによって、かえってうまく互いが共同作業できるという。

さらに第三章では、初期フライブルク期から、『哲学への寄与』までの神論を剔出する。ハイデガーは、初期のころ哲学と神学との分離を主張していた。哲学は無・神論的（a-theistisch）でなければならないという。しかしこの無・神論は、有神論か無神論かということではなく、そもそも神論（Theismus）を論じないということを意味する。つまり、神を最高存在者として論じる存在・神・論としての形而上学を批判していることになる。

ここで、彼は、神学と哲学の分離を主張しながらも、存在・神・論としての形而上学批判を軸として、再度神学と哲学の出会う場所を模索している。その思索が、存在と神と現―存在の三者の関係を問う Ereignis（性起・出来事）の思索なのである。一九三〇年代後半に入り、ハイデガーは、再度性起・出来事から神を問う作業を遂行する。これは、＜過ぎ去り（Vorbeigang）＞の神として、結局最高存在者として神をみる存在・神・論としての形而上学批判の神の思索であった。

またさらに、後期の「形而上学の存在・神・論的体制」においては、思索すべきものへの「退歩（Schritt Zurück）」を遂行していき、最終的に「神なき思索（das gott-lose Denken）」が最も「神に相応しい神（der göttlicher Gott）」に至ることを述べる。以上のような初期フライブルク期の神学的考察、また『哲学への寄与』における＜過ぎ去り＞としての神も、その後の神なき思索も、最終的に＜隠れたる神＞の神学に属することが示された（第三章）。

第二部第四章以降は、特に存在の思索が、否定神学の伝統の中に位置づけられ、そこから形而上学の克服のモチーフが浮彫りになることを剔出している。特に第四章では、ゲオルゲの「語」という詩と、トラークルの「冬の夕べ」という詩を分析している。ここで言葉について所在究明するのであるが、それは言葉と存在との関係を問うている。ゲオルゲの詩は、語が、存在を匿う働きをしているが、存在自身が隠れるので、その語は、失われているということに他ならない。実は、この事態は、存在と語の否定神学的働きなのである。

さらに、トラークルの「冬の夕べ」という詩においては、その「敷居」という詩句が、存在論的差異のその「区―別（Unter-schied）」を意味していることから、その語の否定神学的働きが「痛み（Schmerz）」として考察される。

その後、ハイデガーは、「存在の問い」において、存在という言葉を、「十字に交差した抹消の標」とともに標記することを呈示する。これは、存在が、第一に、主観・客観・図式においては捉えられないことを、第二に、存在自身が自らを隠すことを、第三に、四者連関を意味している。以上のような否定神学的標記の仕方は、主観性の形而上学批判とその克服を意図しているのである。

第五章においては、ヘルダーリンのいくつかの詩を基にして、神々の名を求めても、神聖な名が欠如していることを基に、その否定神学的働きを探究していく。ハイデガーは、ヘルダーリンを「詩人の中の詩人」とするのであるが、それは、「神の不在（Fehl Gottes)」を謳っているからである。しかもその神は、神を超える自然を宿している。この神を超える自然の働きは、否定神学的な働きであり、この地点から形而上学批判と形而上学の克服が可能となることが示された。

第六章。ハイデガーは、シェリングについていくつかの講義を行った。特に一九三六年の講義録は、シェリングの自由論を高く評価して、そこから存在の真理論を着想している。シェリングは、その自由論で、汎神論と自由、体系と自由との相克を問題としたが、そこから、ハイデガーは、自由が存在の真理への自由となっていることを学ぶ。また、シェリングの自由論の実存と根底との働きは、遠心力と求心力として働くことから、ハイデガーは、自らの存在の真理の非覆蔵性と覆蔵性との運動を着想している。さらにシェリングの無底（Ungrund）は、ハイデガーに深淵・脱根底（Abgrund）の思索を着想させたといえるのではないだろうか。結局、無底から実存と根底の働きが出て来るように、深淵・脱根底から非覆蔵性と覆蔵性の運動が出来してくるのである。しかも、このハイデガーの真理論自身が、否定神学の伝統の中に位置づけられるといえる。

第七章では、プラトンの洞窟の比喩を論じている講義録を中心に、また『芸術作品の根源』と『パルメニデス講義』などを基に真理論を論じた。ハイデガーは、洞窟の比喩のイデアと個物の関係から、真理と自由との関係を取り出している。自由は、「真理への自由」となっている。さらに、伝統的な真理観は、「ものと知性との一致」の真理観であった。しかし、ハイデガーによれば、もともとギリシアの真理論は、洞窟の比喩の考察を通して得られたように、覆蔵性と非覆蔵性との運動であった。さらに、洞窟の比喩の善のイデアの分析から、実は、覆蔵性と非覆蔵性との運動としての真理は、それを超えたイデアあるいは、深淵・脱根底から可能となっているというモデルが提出されたのである。

これまでもハイデガーの真理については、覆蔵性と非覆蔵性との運動のみを指摘する考察が多かったが、筆者は、その運動が、深淵・脱根底から可能となっているモデルを呈示していると考えた。しかもその否定神学的考察によって、形而上学の克服が可能となっていることが指摘できる。この論点は、本論文の中心的主張である。

第二部の結論部分である第八章においては、ハイデガーが、これまでこの深淵・脱

根底（Abgrund）をどのように思索してきたかを「根拠の本質について」、『形而上学入門』、一九三〇年代の真理論の諸著作、『根拠律』を中心に検証した。そこでは、深淵・脱根底から投企と被投性の緊張関係、神々と人間とのポレモス、非覆蔵性と覆蔵性との運動が出現してくるという構造が取り出された。そして、その深淵・脱根底としての存在に、「過ぎ去り（Vorbeigang）」としての「最後の神」が現れることが考察された。（本論文では、神と存在との関係は、相互制約の関係ではなく、存在の思索に神が現れると考える。）この「最後の神」は、形而上学批判とその克服の標としての神であり、「貧しさ」としての神である。この深淵としての存在の思索は、否定神学の伝統の中に位置づけられるし、過ぎ去りとしての神の思索は、＜隠れたる神＞の神学の伝統の中に位置づけられる。

しかもこの否定神学は、単に肯定神学に対する否定神学ではなく、肯定神学と否定神学との対立を超えた否定神学であった。またこの＜隠れたる神＞の神学は、＜現れたる神＞の神学と＜隠れたる神＞の神学との対立の中の＜隠れたる神＞の神学ではなく、＜現れたる神＞の神学と＜隠れたる神＞の神学の対立を超えた＜隠れたる神＞の神学なのである。

さらにこの＜隠れたる神＞の神学といったときの「隠れたる」という意味であるが、通常これは、人間の認識に届かないということを意味するため、「隠された」と翻訳されるとき、神ご自身はなんら隠れるところはないということになる。しかし筆者は、この＜隠れたる神＞というのを、神ご自身が隠れるという意味で、つまり神ご自身が隠れるので、人間が認識あるいは言語化できないという意に解するよう提案した。

第三部第九章では、第一章で考察した事実的生経験に即して、信仰の生経験を取り出す作業を、新約聖書の＜放蕩息子の譬え話＞、また弟子の漁りの話と、宮澤賢治の＜よだかの星＞の話から遂行する。特に、＜よだかの星＞では、傷や痛みによって自分自身の立場を放棄することによって、他者を赦し、受け入れる姿を描いた。そのような逆説の愛の論理が、信仰の事実的生経験の中にはある。しかもこのような逆説の愛のロジックである信仰の事実的生経験は、＜隠れたる神＞の思索をもとに遂行されうるのである。

第十章では、このような事実的生経験を基にしたキリスト教哲学は可能であるかが論じられた。特にパスカルの「病の善用を神に求める祈り」の中の分析と、初期ヘーゲルの神学的著作から愛の逆説的ロジックが取り出される。この信仰の事実的生経験は、必ず逆説として展開されることになるが、そのような逆説のロジックは、シェリングの無底やハイデガーの深淵・脱根底から出来してくることが示された。

第十一章では、第十章で展開したキリスト教哲学の可能性を、シェリングの自由論の諸著作とそのハイデガーの解釈を基にして、人間の自由という実践哲学の分野で探っていく。シェリングは、人間の自由は、神への自由として、神の自由即必然性を根拠にしているという。自由は、悪を犯すことのできる自由であるが、その原因を神の実

存と根底の働きから探り、それが最終的には無底から出現することを説く。その無底は、神の生成してくる場であり、時間性が創造される場である。以上のような考察から、新たな宗教哲学を模索する。

三　結論と展望

本論文の結論としてハイデガーの歩みは、事実的生経験を主観・客観・図式では捉えられないという主観性の形而上学の批判と、それを支えていた存在・神・論としての形而上学の批判という二つの形而上学批判とその克服というモチーフの基に進んでいったことが示された。それは、特に一九三〇年代以降存在を深淵・脱根底として捉える否定神学的思索によって可能となったものである。この思索によって、形而上学が一体どこから由来しているのか、形而上学の源泉を捉えることができる。それによって、形而上学の克服が可能となる。以上が本論文の結論である。

しかしハイデガーの思索は、存在の思索であり、そこから倫理学的な自由の問題を扱うことは難しい。特に人間の自由とそこからでてくる悪の問題を扱うためには、今後ハイデガーの思索の基となっているシェリングの自由論や神話論を研究する必要がある。シェリングの自由論の構造からは、ハイデガーの存在の思索が影響を受けているだけではなく、独自の自由についての実践哲学的思索が可能となっている。そのことを第十一章で扱ったが、今後これをさらに発展させる予定である。

（論文審査の結果の要旨）

ハイデガーが、現代哲学において、さらに哲学思想を超えて与え続けてきているその影響の大きさから判断して、ハイデガーの思想的意義については疑う余地がない。しかし、その評価をめぐっては様々な立場からの議論が今なお継続中であり、特にハイデガーとキリスト教あるいはその神学との関係をどのように理解するかについては慎重な検討、精密な分析が要求される。というのも、本論文で批判的に検討されるように、ハイデガーとキリスト教とを対立的に捉え、あるいは両者を無関係とする議論が少なくないからである。ハイデガーとキリスト教との関係の解明は難問ではあるが、それは、ハイデガー研究を深めるためにも、また現代のキリスト教思想の新しい可能性を論じるにも、重要な研究テーマである。

こうした研究状況の中で、本論文は、ハイデガー哲学をキリスト教神学の文脈に積極的に位置づけ、そこから新しい宗教哲学の可能性を探究するというきわめて意欲的な試みを行っており、キリスト教の文脈・視点からのハイデガーの読解が一貫して遂行され、明解な論述が展開されている。まさにここに本論文の独創性が認められ、キリスト教思想とハイデッガーというテーマをめぐる今後の研究は、本論文を信頼できる基礎としてその議論を展開することが可能になった。また本論文は、ハイデガーと同時代（あるいは同世代）やその後に続く現在までのハイデガー論を、またドイツ語、フランス語、英語、そして日本語による広範な先行研究を視野に入れ、それらを明晰に整理することによって、ハイデガー・テキストを分析するための視点と論点を提示している。このことからも、本論文の学術的価値はきわめて高いと評することができるであろう。本論文は、研究史の総括を含む序文と結論を前後に配し、三部に構成された 11 の章から成り立っており、そこには多くの独創的で貴重な知見が提示されている。しかし以下においては、本論文の意義を論じる上で特に重要と思われる点についてのみ指摘を行ってみたい。

本論文の第一の意義は、初期フライブルク期の講義（特にパウロとルターについての）からハイデガー哲学のキリスト教的由来が解明された点に認められる。一連の初期フライブルク講義は、若きハイデガーの思想形成がキリスト教思想との密接な連関においてなされたことがテキスト自体から明確に確認できる点で、ハイデガー哲学の展開過程の中でも特徴的な位置を占めている。本論文第一部ではハイデガーが「探求における随伴者」ルターから、原始キリスト教の信仰（事実的生経験）に向けた過去の形而上学と神学との「現象学的解体」という構想を得たことが明解かつ説得的に論じられている。これは、ハイデガーの思索がどこからどのような問いとの関わりで開始されたのかを解明する上で決定的な意義を有している。

第二の意義は、ハイデガーの思索の展開過程が「形而上学批判とその克服というモチーフ」において首尾一貫した仕方で読解可能であることが示された上で、そこからハイデガーと＜隠れたる神＞の神学あるいは否定神学との近接性・類似性が明らかに

された点である。本論文第二部では、初期フライブルク時代からマールブルク時代を通じて展開されたハイデガーの思索が一九三〇年代以降の形而上学批判まで、たとえば、「深淵・脱根底(Abgrund)」から覆蔵性と非覆蔵性の運動としての真理が顕現するという真理論まで、一貫して展開されていることが詳細に辿られている。本論文によって提出された重要なテーゼは、この真理論がキリスト教思想における＜隠れたる神＞の神学あるいは否定神学の伝統に属しているというものであり、これによってハイデガー哲学とキリスト教思想との積極的な関係を論じる場が明示されたことの意義はきわめて大きい。

また論者は、本論文第二部において、難解とも言える一九三〇年代以降のハイデガーの思索の多様なテーマ（言語論、真理論、芸術論など）とシェリングやヘルダーリンについて独自の解釈とが＜隠れたる神＞の神学と否定神学という視点から統一的に把握できることを、ハイデガー・テキストの緻密な分析を通して説得的に示した。これが第三の意義である。『哲学への寄与』の「最後の神」が＜隠れたる神＞の神学の伝統に属する、という本論文の主張は、今後、「ハイデガーとキリスト教」というテーマを論じる際に無視することができない論点となるであろう。

第四に指摘すべき意義として、本論文第三部において、第一部第二部の精密なハイデガー・テキストの分析の地平に立って、現代の新たなキリスト教思想（宗教哲学）の可能性が具体的に論じられた点を挙げることができる。議論は、まだ荒削りな試論というべき部分を残してはいるが、＜隠れたる神＞の神学から「人間の傷や苦悩や痛みを引き受け、共鳴してくれる神」という神理解を導きだすという構想は、現代のキリスト教思想においてさまざまな仕方で論究されつつある「弱き神」の諸思想の観点からも、重要な洞察と言える。

このように重要な研究成果が提示された優れた論文ではあるが、本論文においては、「ハイデガーとキリスト教」という研究テーマがその最終的な結論に到達したというよりも、むしろさらなる研究課題が浮かび上がることになった。たとえば、ハイデガーとキリスト教との対立やハイデガー哲学とキリスト教との断絶などといった通俗的なハイデガー理解を修正するという点で本論文の論述は十分に説得的であるが、ハイデガーとキリスト教の積極的な関係性を論証する点に関しては、さらに解明すべき問題が残されている。ハイデガーと＜隠れたる神＞の神学や否定神学との類似性ということだけでは、この積極的関係を論証するにはなおも不十分であり、ハイデガー自身が沈黙しているキリスト教との関係性をテキストからいかに解明するのかというハイデガー研究の方法論について、いっそうの錬磨が求められねばならない。論者の今後のさらなる研鑽に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成25年3月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。